

同和問題 学習シリーズ①

『あぜみち』

はじめに

私たちに、生まれながらにして自由平等であり、一人ひとりの基本的人権は永久の権利として憲法により保障されています。

しかしながら、私たちの住んでいる社会のなかには、自由に職業を選択できなかったり、教育の機会が与えられず、居住・移動の自由、結婚の自由などを阻害され、差別されている部落問題が現実存在しています。

この不当な部落差別を完全に解消することは、行政や国民に課せられた責務であり、課題であるといわれています。

そうしたことから、部落問題を正しく理解し、認識していただくため、同和問題の啓発学習シリーズ『あぜみち』を掲載し、部落解消の心を培っていただく糧といたします。

同和問題は――

(1) 秘められた意識

いまも それは

同和問題の取り組みが進められるなかで「差別は悪いことだ」「差別はしてはならない」という考えは広がってきました。しかし、私たちの日常生活を振り返ったとき、まだまだ差別の意識は残って

います。すべての人びとは健康で明るく、そして自由で平等な生活を求めながら、一方ではこのことに気が付かない場合が多いのです。

こうした秘められた意識は、日常の社会生活の中で、とりわけ結婚話がもちあがり、就職の話が進んだときによりはつきり頭をもたげ、時として人の生命まで奪う恐ろしい力と変わっていきます。こうしたことは、「差別はいけ

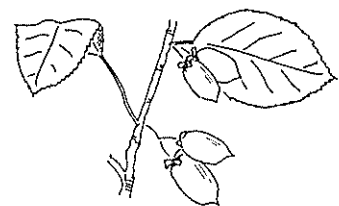
ないことだ」と口でいいながら、その差別をなくするためにどうしたらよいかを考えない態度であり、「たてまえ」と「ほんね」のへだたりをまざまざとあらわしていることとなります。

(2) 部落差別は

今も生きている

では、いったい、どうして差別の意識が顔を出してくるのでしょうか。私たちは今こそこのことをしっかりと見つめなおしてみなければなりません。

同和問題というのは、同和地区の人たちが、差別のために、教育の機会が十分に保障されていないかったり、このことよって就職の機会をとぎされたり、あるいは交際や結婚など、日常の社会生活において差別され、それによって人間の権利が著しく侵されるといふ問題のことです。



私たち、だれであらうと、生まれてくることについて、はたして家や親、財産や生まれるところなどを選ぶことができるものでしょうか。こうした本人にとっての責任や努力の結果でないことを理由にして差別することは、その人の基本的人権を全くふみにじってしまうこととなります。

だから同和問題が生きているということは、私たちの人間に対する見方・考え方が、今もなお古くてゆがんだ考え方に左右され、それによつて社会意識が形づくられていることとなります。同和問題の解決が私たちにとつて重要な課題だといわれるそのわけは、ここにあるのです。

(3) 誤った考えや認識は

差別をうむ

おおよそ、世の中のできごとで、原因もなく起きるということはありません。部落差別はどうして生まれ、残されてきたのでしょうか。このことを考えてみなければ同和問題の本質を科学的に明らかにすることはできません。

江戸時代、幕府は身分制度の社会をつくることよつて、都合のよい社会の秩序を守ろうとしました。したがって、人々は生まれによつて身分が決まり、仕事や居住

地が制限され、身分に応じてくらし方までも取り締まられてきました。この制限のきびしい差別の中で、百姓、町人が上の人に対して抵抗することを抑圧するための政策として、もっと下の身分をつくり、人間同志が憎しみ合うようにしてきました。これが同和問題の起りです。

そして、この身分による差別は明治四年（一八七一）に解放令が出されましたが、やはり解決されませんでした。

その上差別は、理屈にも合わない、全く事実でもない、誤ったいろいろな偏見と結び付いて社会の中にまことしやかに伝えられ、次第に根をはっていききました。

こうした誤った考えは恐ろしいことに次第に社会に広まり、さらに差別を生んでいったのです。私たちは今こそ同和問題についてすじみちを追って学びとり、日常のくらしの中で悪循環をたちきる努力をつみ重ねなくてはなりません。

